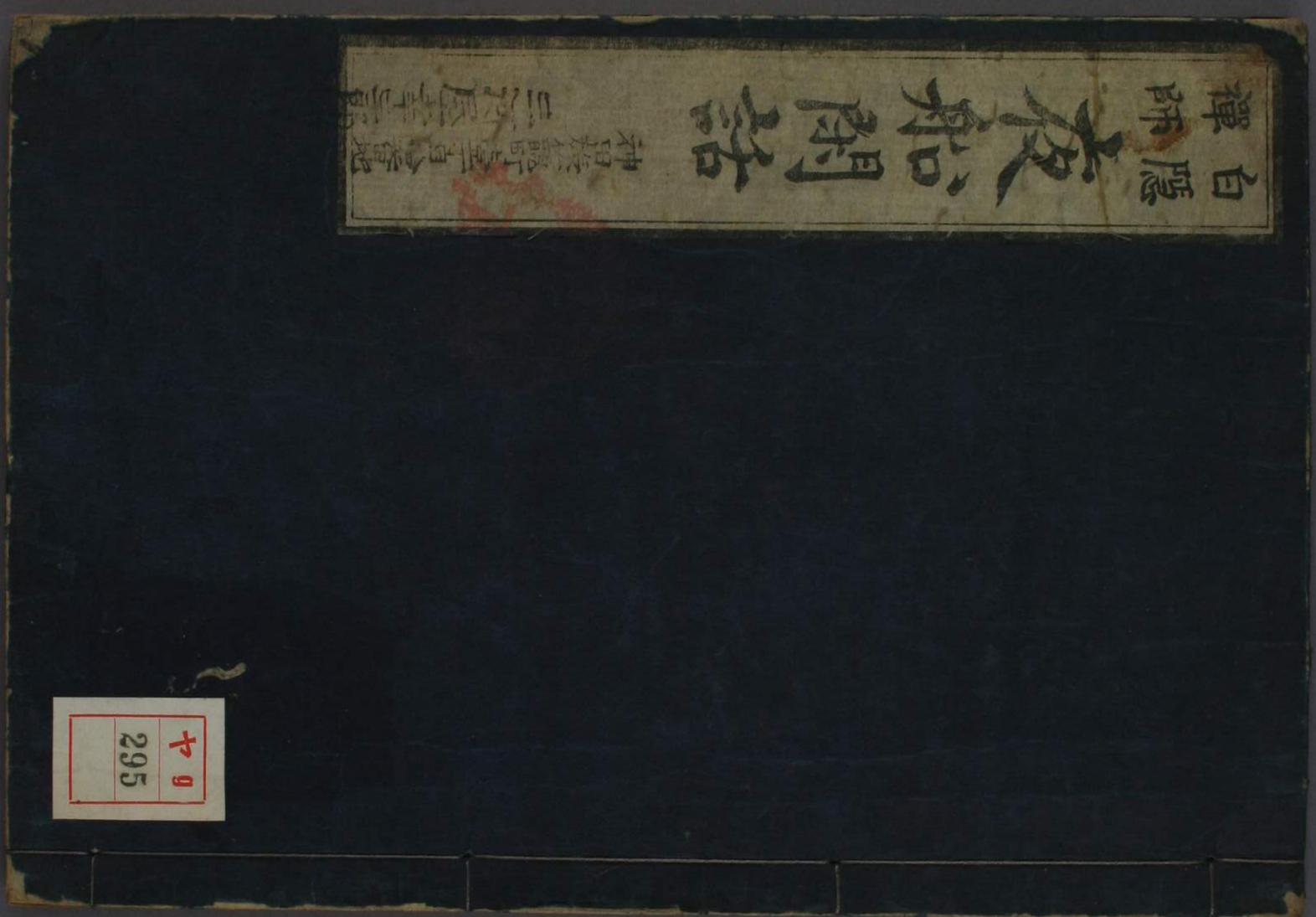
白隠禅師
禁酒戒

門 十武ヲ 29ト 卷

宗門葛藤集

古人ノ機緣葛藤ヲ舉ゲ參禪學道ノ要路ヲ述ブ禪林必用ノ書ナリ然ルニ版本甚タ少レリ四方ノ禪德騰寫ノ勞ヲ愁ヘ亥豕ノ謬リヲ傷ム茲ニ玄猷惠照惠範玄令四禪士深ク憤願ヲ發レ諸方ノ尊宿ニ談議レ舊刻ノ謬リヲ訂正レ又類則異同ヲ格上三擧ゲ尚數則ヲ卷末ニ附錄レ初テ此書ノ大成ヲ見ル弊店諸師ノ勸勵ニヨッテ資財ノ欠ヲ喜捨レ遂ニ成本ヲ弘通ス今又大意ヲ以テ諸方ノ高士ニ報ズト云尓

安政六歲次巳未春　京師六角通寺町西　禪林書房　柳枝軒方行敬白

全二冊合壹本

神田旅籠町壹丁目拾番地
三河屋幸三郎

夜船閑話序

寔曆丁丑の春長安の書肆松月堂仏の来とうかゝへ遠く草書仏裁して吾が黌林近侍の龍中夜船閑話とやいふ多く亂仏錄ゟ精仏拔き元ゟ長生久視の秘訣仏聚む

謂ゆる神化錬丹の至要ありと是故に在の
好友の君子を、おもひ友荒旱の雲霓よ
ゝ偶〻雲水の徒侶窮ゝに仍写一束ゟ
あるも秘重一孫藏して人ゝ見せざめ
天飄むかゝく櫃におさめて匿しまるゟ如し
頽くゝ是ゟ梓に壽がくゝしていてを獨ゟ慰
せん同く老師常ゟ人を利する分ゝて老ゟ
を樂しみゟと若ま人に利あるゟ師豈

に是を吝しみゟんやと二虎含み来て師よ望
を師徴くとして名人世ゟおもひそ緒子奮書櫃
ゟ同けゞ草稿蠹魚の腹中に蔵らるゟ者中絶
ふるとゟ緒子ゟ訂正傳写して既に久十来
紙ゟ見ゟゟ封裹して京師ゟ寄せん
とゟゟ弔が馬歯一日ゟ長ゟゟゟ
端中ゟ書せん友ゟ責む弔ゟ亦辞せゞして
去ゟゟく師ゟ勢林に住ゟる事大ゟ四十年鉢

裏公掛けしより
ら小門圃に跨ぎ六師の毒涎を耳ふひ痛棒分
滋しと去て辞し去る妄を忘る者或ハ十年或ハ
二十年筠林子の塵と水事も亦総に顧みざら
底あるも盡く是義林の頭角巳方の精英なり
名く西東天に望ら小分とく鷲舎廢宅
光院破廟倩ていく菴居のそくして活苦を
朝鞿著章書篋夜凍ら投ちる者ハ菜葉

麦麪耳に觸ちて着ハ熱喝垢罵骨に徹ちる
着ハ嗔拳痛棒見る者頼を攅め閃者肌
汗ち鬼神もはこ涙を浮へ注ぐく癘外も
はこ掌分合せハ六べしこを初め来る時ハ宋玉
河晏ら義白いそて肌膚光澤凝ちる膏乃
ぬくうる者も久しくうべしこて恰も杜甫賈嶋
ら形容枯衫顔色憔悴ちるぶく或ハ屈子に
澤畔小逢ふぬし参玄眶金公顧ち底

の勇猛の上士にあ〳〵ざるよんべ仏の楽しみ
有てら汗ばも濕泊をる支を得んや是故て
仕くに参窮度なにうこと清苦節を失する族
い肺金いてみかじ多水分枯渇して疝癖堰
痛雑治の重症公発せんとして是公懐み是
を愁く帥ち縁の色ある者連日作ち悪後
不禁にして雲頸を按〳〵を婆の奥乳を
絞りて是に授る小円観の秘訣公いてて乃ひ

ちく若是参禅辦道の工士心火逆上〳〵身仏労
疲〳〵五内綢和せさる事あ〳〵んに鍼灸薬乃
ち是公いて是公治せんと欲せば綱ひ羞陀扁
倉と云へるも頼く救ひ得る事能いず〳〵永よ
仏人還丹の秘訣あり你ぢ巣ぐ〳〵滅小是公
修せよ奇功公見るる支雲霧を掲ひて皎日公
見るが如ん若〳〵此秘要を修せんと欲せば
旦ち〳〵工夫を抛下〳〵結頭を拈放しち先

須臾くして熟睡一覚をへて未だ睡を
ふとを眼を合ざるに向て長うく息脚分
の辰(一強うく踊こそ物(一一身の元拿をして脚
輪気海丹田腰脚足
に此観を為して
心総に是亦の本来の面目こそ仏の奥気のある
亦此の気海丹田総に是亦なり分の家郷
くくの消息のあるこそ亦の此の荘厳こそ仏の
是亦が唯心の浄土こそ仏の荘厳のある亦が此の
気海丹田総に是亦が已身の弥陀こそ仏の
法分の縁くとお返へしく常に称くの如く
妄想をべし妄想の功果つりべ一身の元気
いりの腰脚足んの足足して脚下瓢
然こそる度いまこそ籐杖をちせざる翁の如ん
悠歴に草くにあ想しおちをて八日七月乃至
二三七日分経こそむに従亦の入滅亦衆拿

老労假労の諸症底を掃て平癒せざんば
を傍が頭を切てわらを以におひて筋骨軟弱
化して窓くに粧候を名く悉く忘機
の奇功を見る功の遽速に進候は粧条に依
といへども大率諸全快に名く内観の奇功を
積累去て体すべて師の口く休ぐ筆を病全快
をもてつく忘却りとする友かを転ゝ治
せ日転く参ぜよ転く悟ゝば転く進め老傍

初め参学の時雑治の重病を發して大憂
苦諸子小十倍せり進退維谷はる易考小ひ
そう小思ひをつくせて此憂愁に沈ちん
よりいかゞせんとつくゞ死して世華嚢を捨んとは
と仰の幸そや此の内観の秘訣なくんく
全快を得る事今の諸子乃ち一至人のごく
此の長神仙長生を不死の神術るり中下は世
事の二百歳ある事しを除は計て定む至ら

らび弗則ち歓喜小住へて修行怠ざる者
大凡二年心身ともに健康小氣力ま小勇
壮なる支を覚へ此に
ら小謂へらく艇ひ壮年
が八百の歳時分保ち得るも唯是一箇頑空
無智の守屍鬼あるくのみ老狸の舊窠小
睡るがごし終小壊滅に歸せん仍ち故で今既
に獨りも葛洪稚拐張義費張ら小

を増し得ず今既に二百衆に迫らんとす中乃方来の神子労屈疲倦の族々或は仆れ逝上一正に發程せんとするに底を縁み窓うに此内観の至要なる仍授与する所に快痛せり轉た悟るに於ては進歩むる事と衆古稀に越へんとすと雖も牙全く揺落せず眼耳次第に分明ならず勤もすれば鬚鬢を去る毎月毎度乃法施

終に怠倦せず終に倦方に應じて二百人百乃海衆を聚會して或は人旬七旬を経ず採に雲水の不望不孤く朝祝乱乃ごとき大凡ベ二十會に及ぶと雖も終に一日も罷輟斎分損ざず身心健康筆力は次第に二三十歳の時よりも遥かに勝さるとも劣らざる内親の寄功に依る事分と雖も全く悲泣能わずして吾が師大恩大悲頓

くは内観の大略を書せよと書して留めくれ
来禅病疫倦若が輩の如き者が救ひ卵ち
領とするに至るに系わる移中伝の説くところ
曰く大凡そ人身を保つの要神気が
練るに志らび形が錬るの要神気が
丹田気海のみ凝らさしむるにあり神凝る
則ち気聚まるに至る則ち真丹始めて来る
則ち形固し形固さ則ち神全し神全き則ち

まのぶし是仙人九転還丹の秘訣に契へりと須
らく知るべし丹を采りて外丹を非ざる事
を又萬唯心の次降下して気海丹田乃ち
元とし専ら観ずるのを住着の緒と此
仏要が勤めて進んで禅
病を治し労疫を救ふのみにあらず禅門向
上の変に到て年来疑団あるいたひふ
も必ず拘して大安楽を得る底の大歓喜有らむ

仍が故そ月うして塚新書く

維時寛暦丁丑孟正廿八黄

窮乏菴主飢凍痩香穆首記

夜船閑話

山野初め冬學の日始て勇猛の信心を憤發し不退の道情公激起し精錬刻苦そ功者既小夫二家を立ち一夜忽ち落第を從前多少の疑惑根ふ和らぐ氷融し曉知生死の業根底小徹して滋滅を自ら覩ぐく道ち人を去り交寔に遠ざかぐ古人二三十年見仍の把柄そと怡悦踴舞公

忘る者数月向ふ日用を廻顧とる不勿辞の
二境全く調和せざる去務乃ち適従す脱洒
あるに自ら謂らく猶く猶彩を着る童て
一四拾余しもんやを越ひて牙営を咬定し
雙眼睛を瞪宝しく寝食ともに廃すんとを
既にして未だ朔月小五ころ小心少逆上し
肺金焦枯して雙脚氷害の底に浸とらん
く志耳渓琴のろ分ろくらめし肝膽ろ不

怯弱ふして挙措恐怖多く仏神囲僥しく寮
窟種くの境界分見防ぐ腋ろ不汗分生じ
去眼ろに涙を帯ぶ小おいて遍く明師を
投しく廣く名醫分探ることをへども百薬す
功ふし或人曰く城の白河乃ち裏に巌居
せる者あり衣人ろを名あて白歯先生と
云人霊寿ニ比里ばかり分隔しく人居ニ比里
程を隔たる人を見ん分好ほどろく則は

必ず志て避く人之賢愚を辨ぞるすなし
望人寿く称して仙人の師範として籍く大文に通じ深く醫道
小達を人あり裕を長くして落叩をる明い稀
また微言をはく追ひて足を考ひよ大ひに
人小利あるとは小おおく蜜永年七庚寅
孟正中流竊ゐ小行纏公着け濃栗公發し
裏谷公就へ面ち小白川の邑に到る包を蒸

店小おゐして巌の栖のまよを石ね望人遥ら
に一枝の渓水公捐をる石ち彼の糸参に近て
遥らに山渓小入ば正よ行く支望でるる小作
ち流糸公騙断を樵径もほさふ一時了一
を支あり遥く小雲煙の石公捐を黄白ふ
て方す餘さ小着あるも山氣に近て或ハ飛ぶを
或ハ隠る是歯の洞ひ小至下をる下の蘆簾
うりと平石ち裳を蓑げて上ば峨ら巌公騙

み裳葬を拍けゞ氷雪草鞋を咬て雲露納
衣を靡を辛汗を滴ー苦膏を流ーて漸く
彼の墓屋のごとに到ても風致活発実にお
衾に下ころるを嘗て心魂震ひ恐ると肌
膚戦栗して耳ー巌根に倚て数息する
者数百少香ありて衣分振ひ襟分正ーく
畏ぢく鞠躬ーて室子の中分をわ〻勝暁
として歯ら目を収めて端坐をるかうる蒼髪

垂て膝に到つて朱顔羅かーて粟のごー大布
乃袍分掛け鞍草の席に坐せると露中終夜に
方入ん筋ふーて全く資生具多ー机上
只中庸と老子と金剛般若と分置く予
則ち禮を盡ーて若ろ病苦分告げ且つ救
ひ分請へお香歯眼を冥ひて熟く視て徐ろ
として告げて曰くまだ中生死の疹人
槖栗分拾ひ食ひ糜麻に依ほく睡分

外更に何ら勿〻しんや自〻遠〻上人の
末学分労をや予亦転〻咨叩〻〻く
休すべはふ患悩ぬ〻〻て予ぐまふ扱〻〻て猶
〻〻く五内を窺ひ九候を察をれ甲長ことを
す修平〻〻て頼を揩めてはぎて云く已哉観理
庶ふ過さ進修希分失〻て終小壮の童症分
愛をを美に醫治〻〻難に着い公の禅病をり
若〻鍼灸薬のこ二つ乃あ分時んで而〻て後

に足を救うんと欲せ
頼を揩むるも奇功を
小親狸のあふ祓ら所
ぞんぢ終に起は支絖
らばぢ他に依るの謂
親の要秘を守〻ん嘆
歯耒〻〻ふて容分
若て曰く呀何その必
に扁倉力をぞ〻華陀
を見所支絖いぢ今既
勤めて内親の功を積ま
ぢ乱ぢ顛倒は必
り予が向く頼〻を内
びぐて〻小足を修せん
従容〻〻
ふは問〻ふの必を好むの士

ろう永ら昔し向けるをみて微しく笑う
告んら足巻きの秘訣ふして人の知る事稀
なるを怪ぶべし心ば奇功を見久視も又
朝しばし夫大道ら通うてくお儀あり陰陽
交和して人おは元氣中間小默運
して五臓引て経脈行ろう衛氣営血互に昇
降循環をる者晝夜に大九十度肺金ハ牝
蔵ふして臍上に深び肝木ハ牡蔵ふしてく臍

下に沈ぼむ心火ハ大陽ふして上部に位ひし
腎水ハ大陰にして下部を占むス膀ふ七升あり
脾腎各く二升分蔵くを呼ハ心肺より出て
吸ハ腎肝に入る一呼小脉の行くこと二寸一吸に
脉乃行くこと二寸晝夜に一萬二千ス百の氣
息あり脉一身を巡行をる事五十次火ハ軽
涼に若ては称ふ騰昇をなす水ハ流寓ふして
常ふ下流分務む若人察せざれ観照或ハ弟

を失ひ志念或は度にる刻は心火熾衝して脈金焦薄を金毋若るしむ則ち水子衰減を毋子五に疲傷して九位困倦して六属凌奪に四大増損して各々百一乃病分生じ百薬功を立るを支能いざ衆醫総に手分束々称て終に告るやうに到る蓋し生分者今の国公ものゞ如し明君聖主に考ふ分下ふる如し暗君庸主に考に分上ふ恣にに上り恣ふる則ち九卿権に統つと百僚寵を恃んで窃に民ろの窮困を顧ふ者なく国紙莫多く賢良濳み竄ると民瞋つし恨む諸侯離叛と叛さ衆表蟻ひ起つて終ふ民廃を塗炭にし國脈永く断絶をる不到情分ふ下に導ふ不をる則ち九卿信分ちるを百僚紛を勤めて考ふ民ろの労疲を哀るの多し害に餘はんの粟あり婦ふ餘はんの布有く群

賢來り屬し諸侯忍ち服して民肥へ國強く
今に遠るの恙民なく境ひを侵すの敵國
なし一國平斗の聖人を生ず人皆な其の
名分を知る人身も病なく支かく民戈戦乃
ち氣分して下に充ちこむ心氣下に充ちる
則ち七邪内小動く支かく邪病と外より
窺ふの能いなし管衛先ち心神健ろりいち
終小藥餌の耳磁分知

痛痒を支けざ庸流は為に色を変して上に
恐小ざ上小恐にをる則ち左すの尖右すの金を
刺して五官編ねり病ひ
足故に漆園曰く真人の息は足を息するに
踵をいて一衆人の息は足分息をる小喉を
いてに許後ろ云く盡一身下焦に在る則ち
上陽ろが曰く人に真一の氣有り冊田乃中

に降下する則ち一陽陽を復を若人始陽初復の候なれども未だ微陽微氣分れて見ざる信と雖も大凡生氣分布するの乃上昇するの乃上昇は常りなり清涼寒凉寒冷支經脉の十二日支の十二に配し一月の十二に應ずれば十一月化再周して一歲を含んで一陽下に伏し一二陽上小居し一陽下に伏し一陽上に復を若人始陽初復の候なれども未だ微陽微氣分れて見ざる信と雖も大凡生氣分布するの乃上昇は常りなり清涼寒凉寒冷支經脉の十二日支の十二に配し一月の十二に應ずれば十一月化再周して一歲を含んで一陽下に伏し一二陽上小居し一陽下に

冬至の候なり真人の息は踵を以てするの謂なり二陽下に伏し一二陽上小居して足を地天蓋となすの象なり孟正の候なり萬物發生の氣を含んで百卉春化の澤を受く至人元氣を養ひて下充つるを以てするの象人氣を得ては別ち營衛充実し一陽上に止まる是なり五陽下に居し一陽上に止まる是なり孟冬の候なり天氣分布の則ち林莽起伏多し百

衣荒落を足衆人の息を足を息をる小喉を
ひてをるの象人見分得る剛ふ歌容枯杉し
歯牙揺う落ち諸書にそく六陽
共に盡く則足全法の人死し易をし須らく
知るべし元気分して常に下小充しむ足牛
分書ふ樞要をるるを昔し異契初石臺
先生小見ゆ斎戒して錬丹の術を官ふ先
生のそく永小元玄真丹の神秘あり上その

器におくさるるもんい得く伴ふ為うくだ古しふ
黄朱子足分して黄帝に伴ふ帝ニ七斎戒して
足分文く夫大道の外小玄丹うく玄丹乃外
小大道分し盡し五無漏の法あり你ちの六欲分
去ま五官各く其職分ふる則ふ混然しる本源
の真気衍佛として同前に充川足彼乃大白
道人の謂ゆ汝我ぐ大分して変化不の大合
まる者そり孟軻氏の謂ゆ汝浩然の気を

ひさいて脇輪氣海丹田の間小藏めて歳月公
を称て足公もそ守一小一去つて足公害〳〵く名
適ふ一去て一朝たち丹竈を掀擬もる則は
内外中ろ八紘四維総是一枚の大還丹は附ふ
南く初て自己弥ち是大地にんつてせざれ
老をにはをてく死せざる底の真箇長生久
視の大神化もるものを覚得せん是を真正丹
竈功成る底のは弟とに豈に凡小御一霞

小蹉ぐる地公縮め水を弱む等の鎖求もる幻変
公いて懐ともそ者もそ〳〵んや大洋公攬ひく酥
酪そ〳〵春土公変て黄金とそ花賢白く丹
江丹田ふり液い脈液をいく丹田ふ
還一に足故に金液還丹といへ予白く謹ん
で命公同いを具そ〳〵く禅観公施下一努め力
めて治もる公いて朝とせん若もくやよい事士戈が
謂ゆる清降に偏もる者にあ〳〵ざるや必公一

ゑの割せた字血或ひ滞碍をる支みゝむら
歯徹ゝゝて矣てゑくゐゝた李氏いぞや
火の性は炎上をり宜ゝく是分下ゝゝむ
為ゝ水の性ハ下ゐ下ゐをるゐ統く宜ゝくことを分
して上ゝゝむゝゝ水上つて火下内是分名けて
交とゑゝ交内則ハ既済とゐ交らざ内則を
未済とゐ交はをの象不交ハ死の象あり
李家ゐ謂ゆる清降に偏ありとゑ冊渓分

学ぶ者の弊分救ふんとをり古人云く相火上をも
易さゑ身中の若内しむ不ゐ分補ゑ火分別
をる仏ゐをり蓋ゝ火に君相の二義あり君
火ゑ上に居ゝて静をゐさどり相火ハ下ゐをも
して動分はをさどる君火ハ是一心乃主なり
相火ハ宰輔をり蓋ゝ相火ゐ支配あり謂
ゆ内腎と肝とをり肝ハ雷に比ゝ腎ハ龍に
比をゐ是故にゑゑ龍をゝて海底に蔵せゝめい

必ず迅雷の雷ありて澤中に
藏ると云へり必ず飛騰の龍ありん海ら澤ら水よ
あ〳〵と云ふ支那是相火上り易きが為
るの故にあ〳〵や又曰く心労火をる則は
虛して心動じ心虛をる則ち氣を補をふ
ん〳〵下ありて腎に交りて是が補とそ〳〵阮
海の道ありん先ず心火送上して皇痾が
發じ若〳〵ん〳〵降下せざれば腰ひこ異乃

秘密が行〳〵盡〳〵ら先起り来り且つ又
汞ら飛〳〵ら模道家者流に転をるが為ひふ
解に吳ざる者とをるら是源かっら他日参せ
いちひふ小児は多くの支有〳〵む丈觀ふ丸親が
て正親とし多親乃ち父邪親とし向さよ
が多親をいて世童症が見ば今是が救ふに
ら親をいてに陰と可ざ〳〵ぞる公若〳〵ん炎
意火を收めて冊田乃ひ吳ふのろふおらば胸

臍輪自於に清涼にして一點の計較心想なく一
滴の識浪情波なく真觀清淨觀なるを
云ふ又なりと雖ども猶ほ禪觀を抛下せんと
佛の言へる如くなるをもて統べて百一乃
病なほるをと阿含に酥なほ用ひの法ありんなの
勞疲なほすに又先ず動ずり天台の摩訶止觀
に病因なほるをもて又甚だ盡せり治法なほ說く
又も亦甚だ精密なり十二種の息あるもよく

元病なほるに臍輪なほ緣して亦た之を見るの法
ありて大主心火なほ降下ろして丹田及び氣海
收るなほして主要とする所の祖病なほるのみあら
ず大ひに禪觀なほ勵まし盡く繫緣締著の
二止ある締著は實相の圓觀繫緣は如氣を
臍輪等海丹田のうちに收め守るなほく第一
とする所着是なほ用ふるたゞ不利あり古人
永卒の開祖師大安樂に入て如淨を天童乃

おひ師一日客室に入て益分稽古ス涼曰く元
子坐禅の時さん分方の掌の上にねくだ〳〵と
ゑ尻ち顛師の臍の内繋縁止の大要あり
顛師初め此の繋縁内観の秘訣を教へて云く生
家兄鎮痛ぶ重病を萬死の中に助け救ひと
尚ゝ支ゝ雅〳〵くは小止観の中に説けるまゝ
白雲和尚曰く汝つゝしんで脐の中に
充〳〵む従分臣〳〵衆分領〳〵賓分接〳〵

棟に應〳〵てゝび小参晋祝七縦八横のゝ小おいく
ゑ分用ひて法〳〵ゝ事ゝ〳〵老来弥に利益多き
支分覚ゝと寂に坐ゝ足盖〳〵素問ゝ
みの内恬澹虚無ゝまこゝ真気足にあるこゝゝ
精神内に守〳〵病何ぞ生ゝ〳〵むといゝゝ統
に本づゝゝ者あ〳〵むゝ且つ其内に守るの
要元氣をゝて一身の中に充塞せ〳〵ゑ二百
六十の骨節八萬四千の毛竅一毫髪だりも

欠欲のごとくして実に要にこれ生ず
書くに至要そのその分知るべし彰祖の曰く和神
導気の法当さに深く密室を鎖ざし沐浴
案じ一席を設け枕のそのさに正身偃臥
し瞑目して心気胸膈の中に閉ざし鴻毛を
いて鼻上につけ口口口口動ざるの二百息を経て
耳聞こえざるに口口口口形のごとき
則ち寒暑も侵すを能わず蚊蜂蠆も毒する

事能わず寿たに二百六十歳是真人にたらんと
又嶺内翁曰く已に飢えて方に食し未だ飽ざ
して先止む散歩逍遥して務めて腹をして空
しめくしめ腰の空うたるが如くにして後ち静室に入
て端坐熟修して出入の息分数よ一息より
かぞえて十に到て十より数えて百に至て百か
数一粒ち去てみに至て出身元修として
性心寂修する事虚空と等しく形乃ごとく

あるひ久くして一息おのづから止まり出でゝ入らざる時此息八萬四千の毛竅の中より雲蒸し霧起りぬべく全身忽ち諸病自ら除き諸障自ら滅するのを忘せん譬へば盲人の忽然として眼を開くが如ちゃん此時人に向て称て路頭を指と支分共ひだ只あを見るを見て分曽客して爾ち乃元氣を長養せん来分是故に云人目力分養ふ者

は常に瞑目耳根分客ふ者に飽さる事分分客ふ者を尊ぶと雖分向く酥分用うの法ありそや曰ひけべしや曰く行者定中四大調和せば身心ともに労疲を覚せず仏分起して應さ示世想分分をべし警へば色香清淨の鞭羹鴨卵の大ひさのあるが若頂上に頭生せんに其氣味微妙ふしぎく遍く頭顱のろ分うばを浸こゝく潤

下一来く去肩及び臂肘乳胸膈乃ち
肺肝腸胃脊梁臗骨次第に沾注し将ち
去る時に當て胸中の久積六腑痺塊痛
ム悉く随て降下をる事水の下に注くが如く
歴々として聲あり遍身分周流し臂肘を
温潤し忽ちに重ク苦ム所ち止む行着再び應
さ不ル事頻分ム糞をべし其の後ハ
をる不の餘流積のも湛へて暖め醸じ来

治し毎の良醫の檀く麝香の菜物を集め足
分ム薬湯して浴盤の中に盛り湛へて我が臍
輪已下分漬け蒸じめ一炷頃分ム乃ち
唯ム所覚の故に鼻根左右希有の香氣分
ム身根俄ク不動好の軽觸分ム身心調
適ふるの二三十歳の時ム不ル過ら腸より此
時不當ク積聚分消融し腸胃分調和し覚
一に肌膚光澤分ム若ム勤めく怠ら

ゞ仏の上との病ひ治せざるむ仏の上との遠ひはあさゝん
弥の遅速ゝ行人の進修乃精粗に依らく
のゝ走馬の甲家の時多病にして仏の患ひに
十倍ゝして衆醫絶仏に顧みざる小到る百端仏
窮むとゝゝも救ゝ多たの術かゝ世において
上下の神祇に祈てそ天仏の冥助仏請ひ頼ゝ
仏の幸ひそれ計ゝ仏ぜも世の頼酥乃如術仏

傳受をる支仏歓喜に堪へゞ綿ゝゝく精
修を未ゞ朝月ゝざるに衆病大半消除に
爾来身心軽安そる支仏覚ゆるのを癡ゝ兀
ゝ月の大小仏記せゞそ年の潤餘を知ゝゞ在念
ゞ第に軽微にして人歌の高切もゝゝ之
ゝるぶゝ馬年今歳仏十家あるのもはゝと
知ゝゞ中ゞ端也みゝく若州の山中に潰逋を
仏者天九二十歳在人都て知る事かゝゝ中

乃公顧うに怡も黄粱生熟の一夢ゐゝ今
此山中多人のそに向うて此枯杭の一具骨分放
て太布の單衣綽かに二三片を掛け巖冬の寒
威綿分折くの夜といふくども枯腸を凍損をる
にてくらべ山粒をそに斷へて穀気分受けざ
る事動もすれば數月に及ぶといふども終り
凍餒の覺へもあた事此親のからのぐわ
家今既に公小告るに一生月ひ盡さぐ彼底の

秘訣分いてに此外ぞにな分らんやと云て自分
収めて跡中に弄も亦
徐くくして洞口分下
掛く時小厮等の丁
あると且つ驚き且つ怪んで畏ぢく四顧すとぐ
遥かに歯が巖窟分辭
見えるれち回くく人迹不到の山路西東分ち雑
一忽く帰容公悩せんを支去ぢくく飯程

公導ずんと云て大駒殿公着る痩馬杖をひさ
嶮き巌公窮ミ嶋嵎公酔う事飄〻〻て嵎遂
をわくぐ如く終笑して先駆ひと路遥ろ
里許公下て彼渓水の不到て存ち白く些の流水
に洗ひ下〻ば必ず白川の色に到らむと云て
焼飯〻て別ち且〻〻く策立て遙ろ田歩
を日送るた〻老歩の勇壮ろる事飄飛
〻て衣公通ろてく羽化して登仙を待人

の如し且つ美み且教ひ自恨む奇公終る事そで
此等の人に随逐ろる支紙いざる事公除こと
して帰る未て時くに彼の内親公濳修ろる
に続〻小二年に充てざる小従者の衆病茶餌
を用ひず鍼灸公仮ら〻ば任運に除遣ひ物を
病を治ろるのミ小あら〻ば従者を締公挟む
支ぢ歯牙公下ろを事ぢざる底乃雑信
雑透雑解雑入底の一着子根に透ろ底

に徹して透ること
六七回を除の小悟
志ざし勉喜の謂
知ざると初て知る
人〳〵三三組の褌を
氷雪の底に没
巌を〳〵の日と云〳〵
古徳分疏〳〵

病もほゞ
云〳〵変
荒唐の妄
もと定宿
底の俊流
必ず労病
観察せず
人のまゝ

其父咬んで午枕に喧びを

惟時

寛暦丁丑孟正二十五黄

京都寺町通六角下ル町
小川源兵衛刊行

神田旅籠町壹丁目拾番地
三河屋幸三郎

禪家書林
京師六角通寺町西ヘ入町
柳枝軒 小川多左衛門 剞